「教育を言う前にまず教える中身の開発を」

一滴 IDE 現代の高等教育、2010 年 10 月号、

IDE 大学協会、2010 年 10 月 1 日刊を読む

教育を言う前にまず教える中身の開発を

1．大学改革の目玉として、教育の重視が言われている。シラバスの作成、セメスター制への移行、厳格な成績評価と GPA システムの導入、教育課程の確立と人材像の明確化、FD の強化という具合に、次々と教育重視策が打ち出されてきた。そして、昨今ではそれに、授業実施週の確保が加わった。

2．これは授業を設置基準どおり 15 週、試験や補講期間外に確保せよというお達しなのである。もともとは、アメリカのように学年始期が 9 月で、秋学期が年内に終結して年明けから春学期に入り 5 月の頭には終わるというサイクルのセメスター制を、わが国では学年始期が 4 月であるにもかかわらず導入している。したがって、授業週の確保によって、大学は 7 月末までの授業を強いられることになった。

3．この不合理の解決は、4 月学年始期制を維持する限り、3 学期制(クオーター制)を取る以外にない。しかしそれはさて置き、ここでは、このことにみられる教育重視なるものの中身を問いたい。つまり、教育重視とは、暑い夏に学生をただ教室に座らせておくことなのかということである。一番怖いのは、こんなことで、教員は教育義務を果たしていると勘違いし、学生は学習しているつもりになってしまうことである。本来的な教育の強化は、学生の自己学習を踏まえた上での教室内での教員と学生とのインターアクティブな授業展開の実現によってのみ果たされる。

4．問題は、こうした教育重視の意味の取り違えが、ほとんどすべての改革を覆っていることである。教員がこうした形式的な改革を唯々諾々と受け入れているのは、インターアクティブな授業ができない、それに耐えられる中身を持っていないからであろう。文系と称する分野で多々みられる翻訳ベースの評論や、理系に多い狭い視野の研究では、多様なレディネスの学生たちとのインターアクティブな授業で教えるべき中身を生み出すことはできない。現在の改革を象徴する専門職大学院にしても、教えるべき問題解決型の学問の開発を怠り、実務経験者を置けば専門職教育になるという形式的な発想に陥っている限り、本当の意味でのプロフェショナル教育の確立は望むべくもない。

5．教える中身の開発、つまり研究とされるものの内実の改革なくして、教育の改革などありえない。その意味でのみ、大学において研究と教育は不可分のものであり、教員はそのことをなりふり構わず主張し、実践すべきなのである。

[コメント]

では、研究型の大学においても、また、教育型の大学においても実務経験者を含む社会人、学生、大学院生に現在のスタッフが教えるべき内容をいえば、必ずしもそうではない場合が多い。一度も社会で働いた経験のない人が経営学を担当できるのか。一度も学校などで教えたことのない人が教員養成を担当できるのか。断じて否である。大学教員こそインターンシップが求められる。また、いくらレベルの高い研究をしていても、それを教える際には教授法が必要だ。一度も教授法のコースを履修していない人は、教えることが難しいのではないか。日本の大学の中には。大学や大学院での教授法についてのコースが見られない。これも大問題。問題が多いのが大学か。

－ 2010 年 11 月 15 日林　明夫記－